報　文

親の心理特性に対する子どもの認知とその影響に関する一考察
―完全主義について―

峯　恵美子[1]、古賀靖之[2]

([1]佐賀市適応指導教室、[2]西九州大学)

(平成18年12月22日受理)

One consideration about the recognition of a child for a psychology characteristic of a parent and the influence-about Perfectionism

Emiko MINE[1], Yasuyuki KOGA[2]

(*The Public Adaptation Assistance Center in Saga city, Nishikyushu University*)

(Accepted December 22, 2006)

Abstract

This study was conducted for the purpose of examining whether a child's own perfectionism was formed through parents' perfectionism or parents' perfectionism whom a child recognized. Questionnaire method was conducted for the father, mother, and child (junior high school 1-3 grader) of 126 households, and measured the perfectionism tendency and the bringing-up attitude by parents answer, an image of parents' perfectionism and a depression tendency by entry of a child. Result, the height of parents' perfectionism did not have an influence on perfectionism of a child, and it became clear that height of parents' perfectionism whom a child recognized had an influence on a score of child's own perfectionism. Moreover, the influence of the perfectionism on a child of the mother through the excessive-meddling tendency to a mother's child became clear. In addition, although the influence of the perfectionism on a child was not seen through a child's cognition from a father's perfectionism, the result that the warmth of bringing-up of a father controlled a child's depression was shown.

Key words ; Perfectionism 完全主義, depression 抑うつ性,
bringing-up attitude 養育態度, warmth of bringirg-up 養育の暖かさ,
excessive-meddling tendency 過干渉傾向

1．問題と目的

私たちは誰でも、「やるべきことはきちんとやりたい。自分を好ましく思いたい。」という、自己評価や自尊心を高めたいという欲求がある。しかし、人々の中にはこのような「きちんとやりたい」という欲求が強すぎて、些細なミスでも失敗と捉えてしまうことで抑うつ感を感じる人もいる。一般に、物事において過度に完全性を求めることを「完全主義（perfectionism）」という。完全主義は無気力や神経症、アルコール依存症や思春期やせ症など、多くの心理・社会的問題との関連が指摘されており（Pacht,1984）、そのなかでも不適応との関連が多く取り上げられている。これまでの研究から完全主義は抑うつをもたらす心理的要因であることが確認されている（Heiwitt & Flett, 1990, 1991: 大谷・桜井, 1995; 桜井・大谷, 1997; 辻, 1992）。

では完全主義というパーソナリティ特性はどのようにして形成されるのだろうか。完全主義というパーソナリティ特性の形成に影響を与える要因としては、家庭、仲間関係、学校のほか、社会・文化的要因など、様々な要因が考えられる。その中で、桜井（2004）は完全主義の形成について、親子間伝達の可能性を検討している。桜井（2004）は子どもによる両親の完全主義傾向の評定により、母親と子どもの完全主義が類似していることを見出し、母親の養育による完全主義傾向の伝達を推定している。

しかし、これは子どもによる評定との関連であり、実際の母親の完全主義の影響なのかは分からない。向井（2002）は偏見の親子間伝達の研究において、子どもの偏見は認知された親の偏見と高い相関があるが、実際の親の偏見とは弱い相関であることを見出している。このことから、子どもの完全主義においても母親との相関ではなく、認知された母親との相関ではないかと考えられる。そこで、完全主義の伝達について、親の完全主義が直接伝達されるのではなく、親イメージという認知を媒介にして伝達している可能性が考えられる。また、親イメージの形成においては両親の養育行動という持続的状況が関与すると考えられる。Parkarら（1979）はいくつかの因子分析研究から両親の養育行動の主要２因子にcareとprotectionをあげている。

以上のことにより本研究では、親子間伝達の可能性の視点から完全主義の形成について検討を加え、それがどのような形で関連しているのかを検証することを目的とする。仮説に示すように子ども自身と子どもの認知した親の完全主義傾向、実際の親の傾向と養育行動との関係を検討することにより、親イメージの媒介についての可能性を明らかにしていきたい。

2．方　　法

(1) 実施方法

１）調査内容

以下に示すように、子ども版・両親版と質問紙を作成し、それぞれ別個に回答してもらった。

①子どもへの質問内容（完全主義尺度、父親の完全主義に対するイメージ、母親の完全主義に対するイメージ、抑うつ尺度）

②父親への質問内容（完全主義尺度、子どもに対する養育態度、抑うつ尺度）

③母親への質問内容（完全主義尺度、子どもに対する養育態度、抑うつ尺度）

２）対象

小城市内の中学校に通う中学１～３年生126名（男子56名、女子66名）とその両親。

３）調査方法

中学校にアンケート用紙を持参し、各クラス担当の先生方に配布していただき、生徒にはそれを持ち帰って、両親ともにつけていただくようにお願いした。回収はクラスごとで、後日まとめて回収した。調査期間は2005年８月～2005年９月である。

3．結　　果

(1) 性差・学年差の検討

子どもの完全主義尺度、子どもから見た両親の完全主義尺度、子どもの抑うつ傾向における性差・学年差を尺度ごとに検討した。

１）子どもの完全主義の性差・学年差の検討

完全主義とその下位尺度について、性差を検討するために男女の平均値の差の検定を行った。結果をTable1に示す。

完全主義、その下位尺度のいずれにおいても男女の差は有意ではなかった（$t = -1.77 \sim 0.44$）。

学年を独立変数とする１要因分散分析を行ったところ、学年の主効果は認められなかった（$F(2, 126) = 2.02$, ns）。

２）子どもから見た父親の完全主義における性差・学年差の検討

子どもから見た父親の完全主義についての性差を検討するために男女の平均値の差の検定を行ったところ、５％水準で有意な差が見られた。結果をTable2に示す。

子どもから見た父親の完全主義傾向は男子の平均が42.00

(SD=6.79)、女子の平均が39.30(SD=7.14)であり、男子のほうが女子よりも有意に高い（t=2.20、p<.05)。そこで下位尺度ごとの結果をみると、父親の強迫的努力について５％水準で男子の方が女子よりも有意に高く評価している（t=2.56、p<.05）という結果が得られた。
学年を独立変数とする１要因分散分析を行ったところ、学年の主効果は認められなかった（F（2、126）=0.32、ns)。

３）子どもからみた母親の完全主義における性差・学年差の検討

子どもから見た母親の完全主義についての性差を検討するために男女の平均値の差の検定を行ったところ、１％水準で有意な差が見られた。結果をTable３に示す。

子どもから見た母親の完全主義傾向は男子の平均が43.86(SD=7.84)、女子の平均が40.09(SD=7.14)であり、男子のほうが女子よりも有意に高い（t=2.92、p<.01)。そこで下位尺度ごとの結果をみると、母親の失敗恐怖について１％水準で男子の方が女子よりも有意に高く評価している（t=2.65、p<.01）という結果が得られた。

学年を独立変数とする１要因分散分析を行ったところ、学年の主効果は認められなかった（F（2、126）=0.10、ns)。

４）子どもの抑うつ傾向における性差・学年差の検討

子どもの抑うつ傾向について、性差を検討するために男女の平均値の差の検定を行った。結果をTable4に示す。

中学生における抑うつ傾向では、男女の差は有意ではなかった（t=—0.48)。

学年を独立変数とする１要因分散分析を行ったところ、学年の主効果は認められなかった（F（2、126）=1.00、ns)。

(2) 子どもの抑うつの高群と低群の比較

子どもの抑うつについて、平均値以上のものを高群、平均値未満のものを低群として操作的に分類し、他のそれぞれの尺度の平均値の差の検定を行った。結果をTable５に示す。抑うつ高群が低群よりも有意に得点が高かったものは、「母親の過干渉傾向」（t=2.01、p<.05）であり、抑うつ高群が低群よりも有意に得点が低かったものは、「父親の養育の暖かさ」（t=-2.99、p<.01）である。

(3) 子供の完全主義と両親の完全主義・子供の認知の主効果、交互作用の検討

子どものもつ両親の完全主義のイメージ、実際の両親の完全主義が子どもの完全主義にどのように関連しているかを検討した。手続きとして、子どもの完全主義尺度全体得点を従属変数とし、子どもからみた両親の完全主義の平均点で分けた２群（高群・低群）および実際の両親の完全主義の平均点で分けた２群（高群・低群）を独立変数とする２要因の分散分析を父母それぞれについて行った。

１）子どもの父親イメージ・実際の父親の完全主義の子どもの完全主義への影響

子どもからみた父親の完全主義の主効果が有意であった（F(1,122)=7.61、p<.01)。実際の父親の完全主義の主効果、交互作用はともに有意ではなかった。結果をTable６に示す。

２）子どもの母親イメージ・実際の母親の完全主義の子どもの完全主義への影響

子どもからみた母親の完全主義の主効果が有意であった（F(1,122)=26.33、p<.001)。実際の母親の完全主義の主効果、交互作用はともに有意ではなかった。結果をTable７に示す。

(4) モデルの検討

モデルの検討には共分散構造分析を用いた。モデルとデータの適合の指標は本研究ではGood Fix Index（以下GFI：0～1の範囲をとる)、その修正値であるAdjective Good Fix Index（以下AGFI)、カイ二乗検定を採用した。

１）仮説モデルの検討

仮説モデルについて共分散構造分析を行った結果、GFI＝0.85、AGFI＝0.44と、GFIとAGFIの値の差が大きい。またカイ二乗値＝62.26であり、このモデルを棄却した場合の危険率はとても小さく、このモデルの採択は出来ない。そのため、モデルの修正を行った。

２）モデルの修正

仮説モデルのパス図から、父親の完全主義の影響をモデルから削除した。また、母親の完全主義→子どもからみた母親の完全主義の間の媒介変数として、母親の養育態度のなかの過干渉傾向を設定した。このモデルのパス図をFig２に示す。

この修正モデルを共分散構造分析で検討したところ、GFI＝0.999、AGFI＝0.996とともに高い値を示し、カイ二乗＝0.28とモデルを棄却した場合の危険率も高く、棄却することは難しい。よってこのモデルを採択した

３）子どもの抑うつの抑制モデル

父親の完全主義の子どもの完全主義への影響は見られなかったが、これまでの分析により、父親の養育を通しての子どもの抑うつの抑制モデルが想定された。モデルをFig３に示す。このモデルを共分散構造分析により適

合を検討したところ、GFI＝0.94、AGFI＝0.87とともに高い値を示している。カイ二乗＝31.17とモデルを棄却した場合の危険率には高くないが、このモデルを採択した。

4．考　察

(1) 尺度の学年差・性差について

1）子どもへの質問内容

①子どもの完全主義の性差・学年差

学年差はなく、性差についても完全主義全体、下位尺度のいずれにおいても男女の差は有意ではなかった。中学生を対象として実施した完全主義に関する先行研究はないが、辻（1992）が行った青年の完全主義を検討した研究で性差は報告されていない。しかしながら河村（2003）の研究では、男子の完全主義の方が女子よりも５％水準で有意に高いという結果が得られている。この理由について河村（2003）は「女子の方が成功恐怖が高いことがこれまでいわれており、男子のほうが女子よりも自らの完全主義傾向を認めやすかったと考えられる。」と述べている。成功恐怖とは、Horner,M.S（1970）の研究で示されたもので、女性は男性に比べ成功に対する不安が強くなっているというものであり、その不安のために高い理想を掲げてそれを完璧にこなそうとする完全主義傾向は女子の方が低いということである。このような不安は女性が生来的にもっているものというよりも、心理社会的に価値規範となっている男らしさ、女らしさといった性役割に関する考え方から起きるものであると指摘されている。このことを考慮すると、今回筆者が実施した中学生に対する調査結果からみれば、中学生においては成功恐怖がまだ明確に形成されておらず、そのため男女の有意差は出なかった一因ではないかと考えられる。

②子どもからみた父親の完全主義の性差・学年差

性差では、子どもから見た父親の完全主義傾向は男子のほうが女子よりも有意に高かった。完全主義の下位尺度ごとの結果をみると、父親の強迫的努力について男子の方が女子よりも有意に高く評価しているという結果が得られた。つまり、中学生の男子は女子よりも、自分の父親は完全性に向かって努力を重ねていると感じているのである。

③子どもからみた母親の完全主義の性差・学年差

性差については、子どもから見た母親の完全主義傾向は男子の方が女子よりも有意に高い。下位尺度ごとの結果をみると、母親の失敗恐怖について１％水準で男子の方が女子よりも有意に高く評価しているという結果が得られた。つまり中学生の男子は女子よりも、自分の母親が不完全性にマイナスの意味づけをしていると受け止め、完璧であることを求めて失敗を回避しようとする傾向にあると感じる傾向にあることが伺えるのである。

④子どもの抑うつ傾向の性差・学年差

男女差は有意ではなかった。しかし、得点をみると女子の方が得点が高い。性差に関しては、本研究と同様に、女子が男子よりも高得点であったという報告が多くを占めている（村田ら、1996）。今回の結果は、児童期には性差なないが、思春期までには大人と同じような女性に多い性差がみられるようになるという児童・青年期のうつ病の疫学調査の結果を支持するものである（六角、2000）。思春期に入ると女児の罹患率が増加する理由としては、認知スタイル、思春期初期のネガティブなライフイベントの存在やタイミング、ホルモンの変化などが挙げられている。

臨床的な介入が必要とされる重症度に近い抑うつ群を知るために15項目版DSRS－Cのcutoff scoreを14点とした菅原・他（2002）を参考にして検討を加えると、今回の対象の中でこの14点を越える子どもたちは126名のうち29名（男子14名、女子14名）となる。比率では23.0％に該当する。そのことは抑うつ感、悲哀感、孤独感、無気力感で苦しんでいる子どもたちが実際にはかなりの数いることが示唆されるのである。

児童期・青年期の抑うつ症状は成人の抑うつ症状と類似しており、成人と同様の抑うつ状態が形成される（傳田・他、2002）。加えてそれは成人以上に衝動性や自己破壊性の強いものであるとさえ言われ、中学生に対する対応においてはこのことについても十分な注意が必要である。

(2) 子どもの完全主義・抑うつの高群と低群の比較

1）子どもの完全主義の高群と低群の比較

子どもの完全主義が高い群は低い群と比較して、「子どもからみた父親の完全主義」「子どもからみた母親の完全主義」の得点が有意に高かった。子どもの抑うつ傾向、両親の完全主義、両親の養育態度、両親の抑うつ傾向には有意差は見られなかった。完全主義の高い子どもは、低い子どもと比較して自分の両親についても高い完全主義を持っていると評定しているのである。

2）子どもの抑うつ傾向の高群と低群の比較

抑うつの高群は、低群と比較して「父親の養育の暖かさ」の得点が低く、「母親の過干渉傾向」の得点が高い。抑うつが高い子どもは、父親の養育において暖かさが低く、母親の過干渉傾向が強いと認知している。つまり、父親の養育の暖かさは抑うつを低減し、母親の過干渉は抑うつを増加する作用となりやすい。その一方で、「父親の過干渉」と「母親の養育の暖かさ」は抑うつの高い

子どもと低い子どもの間に有意差はない。父親の過干渉と母親の養育の暖かさは、直接には子どもの抑うつ感に影響を及ぼしていないと推察できる。これは父親・母親の養育にいける性役割と関係するのではないかと考えられる。

子どもが心のなかで期待する父親像、母親像はどのようなものなのであろうか。現代、家族のあり方は多様化し、結婚率の低下、少子化、育児不安、虐待など家族生活にまつわる課題は多くあげられている。現代の子どもたちはどのような父母像を抱いているのだろうか。村瀬（2001）は同一地域で10年間の期間をおいて、子どもの抱く父母像・家族像についての調査を就学前児、小・中・高校生ならびに児童養護施設に施行している。その結果、子どもたちは自分たちの家庭生活の現実体験とは一致していなくともイメージの中では、「父親は家族のよい意味での権威と保護のモデル、母親は家族成員をまとめるべく細やかにフォローする、心身の救護の対象者」と応えている。また、村瀬（2005）が大学院生40名余を対象に行ったアンケート結果においても、「父親はよい意味での権威やリーダーシップを、母親は細やかな情愛を家族に注ぎ、家族をさりげなくまとめる存在」と集約されるような父母イメージを語っている。

今回筆者が実施した中学生への調査結果からは、母親の養育が暖かいほど子どもの抑うつが軽減され、父親が厳しすぎると子どもの抑うつ傾向が強まるという見解は支持されていない。その一方で厳しい母親は子どもの抑うつを促進し、暖かい父親は子どもの抑うつを抑制するということが示唆されているように思われる。つまり、子どもが心の中で抱いている父親像・母親像と実際の父親・母親のあり方の相違が子どもの抑うつに影響するのである。より暖かく、甘えの対象であることを期待する母親が厳しいことで子どもの抑うつは高くなり、厳しくリーダーシップをとる父親が暖かく優しいことで、子どもの抑うつ傾向は低くなる傾向があるといえるのである。

(3) 両親の完全主義と子どもの認知の子どもの完全主義への効果

子どもからみた両親の完全主義と実際の両親の完全主義を独立変数、子どもの完全主義を従属変数とする２要因分散分析を行ったところ、子どもからみた両親の完全主義と実際の両親の完全主義の交互作用は見られなかった。つまり、両親の完全主義が高いか低いかによって、子どもの認知する両親の完全主義が子どもの完全主義へ及ぼす効果に、有意な差はないということである。また、実際の父親の完全主義、実際の母親の完全主義はいずれも主効果は見られなかったが、子どもからみた父親の完全主義、子どもからみた母親の完全主義に主効果がみられた。両親の完全主義が高いか低いかによって、子どもの完全主義の得点には有意な差はないが、子どもが認知する両親の完全主義が高いか低いかによって子どもの完全主義の得点が異なるのである。このことから、子どもの完全主義に直接影響するのは、実際の両親の完全主義ではなく、子どもが両親に対して抱いているイメージであることが示唆されるのである。

ここで、Flett, Heiwitt, Oliver& Macdonald(2002)が紹介しいる、４つのモデル（①社会的期待モデル②社会的反応モデル③不安養育モデル④社会的学習モデル）に基づいて検討すると、「社会的期待モデル」は周囲の人達が子どもに完全性を求める（期待する）ために子どもに完全主義が発達すると考えるモデルである。親子関係においては親が子どもに完全性を求めることが、子どもの完全主義の発達に関与していると考えられる。しかし今回の研究では両親の子どもへの期待については調査していないため、このモデルとの関連について言及することはできない。

「社会的反応モデル」は子どもが周囲の人たちからの厳しい処遇（例えば虐待）から自分を守るために完全主義を発達させると考えるモデルであり、物事を完璧に行うこと（完全主義を身につけること）で、自分への厳しい処遇から少しでも逃れられるかもしれないという考えに基づいている。このモデルを直接検討した研究はほとんど見当たらず、今回の調査結果もこのモデルを支持するものではない。

「不安的養育モデル」は子どもがミスを犯すのではないかと過度に不安がる親に養育されると、子どもに完全主義が発達するという考えに基づくものである。このモデルについても、不安養育の検討は加えていないため、このモデルを支持しているとはいえない。

「社会的学習モデル」は子どもが周囲の人たちをモデル（模範）にして完全主義を発達させていくと考えるモデルである。このモデルはBandura(1986)の社会認知理論によってある程度の妥当性が保証されていると言える。親子関係に限定すると、子どもは自分の親をモデルにして完全主義を学習するものと考えられる。今回の結果では子どもの完全主義は、子どもが両親に対して抱いている完全主義イメージの効果が見いだされており、子どもが心の中に抱いている両親の完全主義をモデルにして自分の完全主義を形成していると考えられ、この社会的学習モデルを支持した結果であるといえる。

(4) 仮説モデルの検討について

１）子どもの完全主義と子どもの認知、両親の完全主義のモデル

本研究では、子どもの完全主義は、親の完全主義が直接伝達されるのではなく、親イメージという認知を媒介にして伝達しているという仮説を設定してモデルを検討

した。その結果、モデルとデータの適合からモデルの採択は危険であると判断され修正モデルを構成したところ、望ましい適合を示した。また、このモデルの部分評価においても、すべての因果係数が統計的に有意な水準にあることが導きだされた。このことから、修正モデルを採択し、考察を行う。

仮説モデルの修正について、2点が行われた。1点目は父親の完全主義の子どもへの影響の削除、2点目は実際の母親と、子どもの認知の間の媒介変数として、母親の養育態度の追加である。

仮説モデルでは母親からの影響とともに、父親からの影響を想定していたが、父親から子どもへのパス係数はいずれも有意ではなく、母親からの影響のみが有意であった。完全主義というパーソナリティは、主に母親を通じて子どもに伝達されるのではなかろうか。

桜井（2004）が大学生を対象に自分と両親の完全主義について評定した研究においても、自分の完全主義と母親の完全主義の間に有意な正の相関が認められているが、自分と父親の完全主義の間には有意な相関は認められていない。このことは、実際子どもに接する時間が長く、子どもとの距離が近い母親のほうがより子どもに影響を与えやすいのではないかと結論づけられるのである。

河村（2003）は高校生を対象に親の期待と完全主義について心理的距離を交えて検討している。心理的距離とは「自己がある他者とのあいだで、どれほど強く心理的な面でのつながりを持っていると感じ、どれほど強く親密で理解し合った関係を持っていると感じているかの度合い」であると金子（1991）は述べている。河村（2003）研究によると、男子の父との心理的距離が男子の母との心理的距離よりも有意に遠いこと、女子の父との心理的距離が女子の母との心理的距離よりも有意に遠いことが示されている。以上のことより、日常接触が多く、心理的距離の近い母親から完全主義というパーソナリティが伝達されていると考えられる。

母親の完全主義が直接伝達するのではなく、子どもが持っている母親の完全主義のイメージという認知が媒介するという仮説は支持されたが、実際の母親の完全主義と子どもの認知する母親の完全主義のパス係数は有意ではなかった。そこで、母親の養育態度のなかの過干渉傾向という媒介変数を設定したところ、すべてのパス係数が有意となった。つまり、母親の完全主義は養育を通じて子どものなかに母親イメージを形成し、それをモデルに自分の完全主義を形成していくのである。

2）子どもの抑うつ傾向と両親の完全主義・養育・抑うつのモデル

子どもの抑うつ傾向を説明するモデルを作成したところ、父親の養育態度の暖かさが子どもの抑うつを抑制するモデルが導き出された。父親の完全主義の低さは父親の抑うつを抑制し、それは子どもに対する養育の暖かさにつながる。そして父親の養育の暖かさは子どもの抑うつ傾向を抑制するのである。一方、母親の完全主義は子どもに対する過干渉傾向を強めていたが、過干渉傾向から子どもの抑うつ傾向へのパスは有意ではなかった。また、母親の養育の暖かさから子どもの抑うつ傾向へのパスも有意ではなかった。

しかし、菅原ら（2002）の小学生を対象に検討したモデルでは、母親の養育の暖かさが子どもの抑うつを抑制していることが示されている。これは対象年齢の相違によるものであるのか、今後詳細な検討が必要である。

落合・佐藤（1996）は親子関係の発達的変化について検討しており、そのなかで中学生は、「親が自分を危険から守る親子関係」「親が自分を抱え込む親子関係」「自分が困った時には親が支援する関係」を生きていると思っていると報告されている。

成人の抑うつには日常生活におけるネガティブイベントが影響することが言われているが（外山・桜井、1999）、思春期の子どもの抑うつも成人と同様に、友人関係や勉強、学校生活など家庭内外のネガティブなライフイベントが影響すると考えられる。両親の落ち込みの低さは家庭の雰囲気を暖かいものにし、その両親のサポーティブな姿勢は、親が自分を守ってくれるという親子関係の中にいる中学生にとって、ストレスイベントを体験したときに落ち込みを予防する、あるいは軽減する作用を持つのではないかと考えられる。

(5) まとめと今後の課題

本研究は完全主義の形成について親子間伝達の可能性の点から検討し、どのような形で関連しているのかを吟味することを目的とした。

その結果、両親の完全主義の高さは子どもの完全主義には影響を及ぼさず、子どもの認知した両親の完全主義の高さが子ども自身の完全主義の得点に影響を及ぼしていることが明らかとなった。子どもへの影響は子どもの認知（親の完全主義認知）を通して起こるという仮説は支持された。

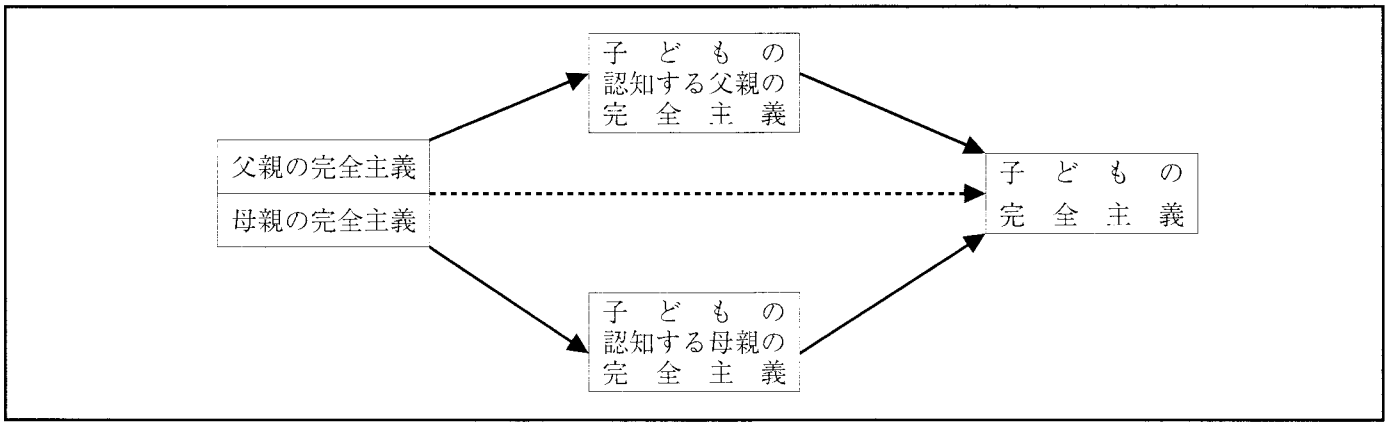
次に、両親の完全主義から子どもの認知を通じて子ども自身の完全主義の形成への因果モデルを作成したところ、母親の子どもへの過干渉傾向を媒介とした母親の完全主義から子どもの完全主義への影響が明らかとなった。つまり、母親の完全主義は養育を通じて子どもの心の中に母親イメージを形成し、それをモデルに自分自身の完全主義を形成していくのである。

なお、父親から子どもの認知を通じて子供の完全主義への影響は見られなかったが、父親の養育の暖かさが子どもの抑うつを抑制するという結果が示された。父親の

サポーティブな子どもへの態度は、子どもの落ち込みを軽減すると考えられる。

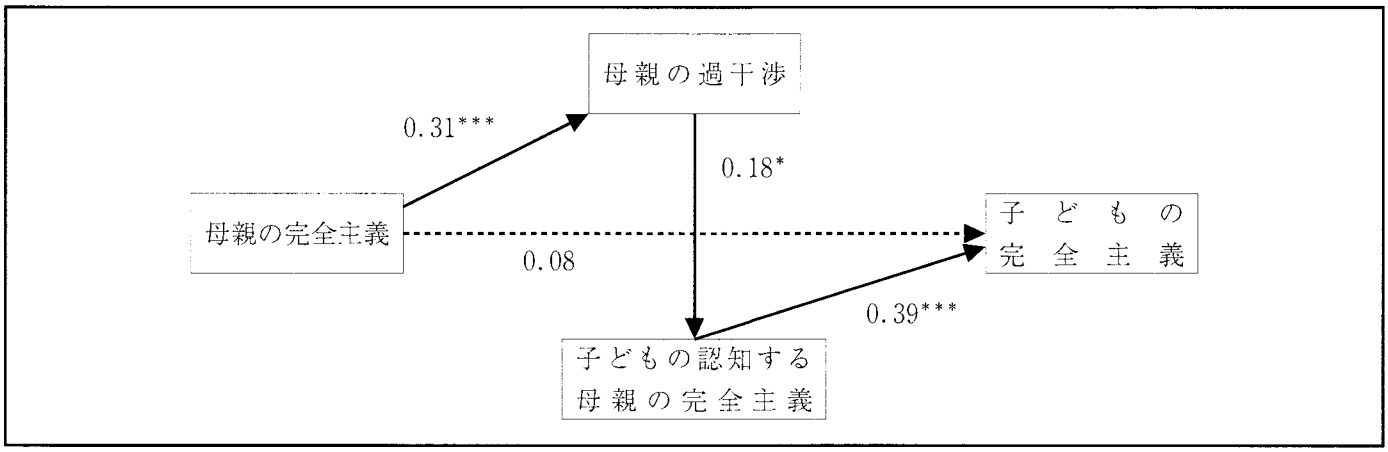
今回の調査結果により、子どもの完全主義の形成には両親の完全主義が直接影響するのではなく、子どもの認知を媒介するのではないかという仮説が支持された。

今回は完全主義の形成について親子関係の視点から検討してきたが、仲間関係や学校・教師との関係のほか、社会・文化的要因など家庭外での子どもを取り巻く影響の可能性も考えられ、さらに多角的な視点をもった検討が必要であるといえる。



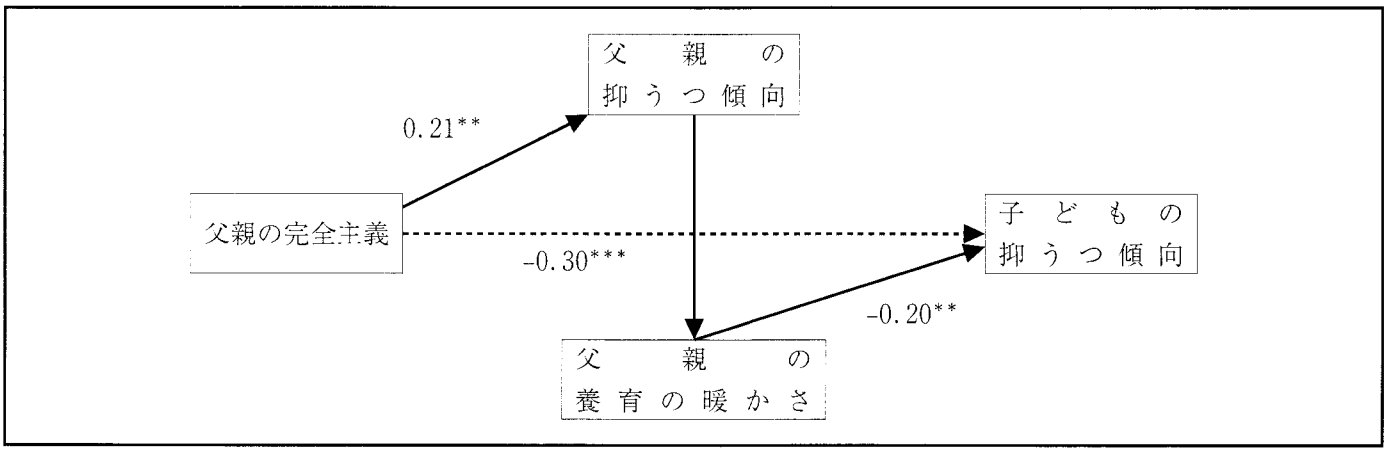
（ ⟶ は強い関連、-----▶ は弱い関連）

Fig 1　両親の完全主義と子どもの認知が子どもの完全主義に及ぼす影響に関する仮説



（ ⟶ は有意なパス、-----▶ は有意ではないパス、*p<.05、***p<.001 ）

Fig 2　母親の完全主義、過干渉傾向、子どもの認知と子どもの完全主義に関するモデル



（ ⟶ は有意なパス、-----▶ は有意ではないパス、**p<.01, ***p<.001）

Fig3　両親の完全主義、抑うつ傾向、養育態度と子どもの抑うつ傾向に関するモデル

Table 1　子どもの完全主義とその下位尺度の性差

	男子平均（SD）	女子平均（SD）	t 値
理想追求	15.21 (4.29)	16.08 (3.85)	-1.17
失敗恐怖	15.02 (3.11)	14.52 (3.74)	0.80
強迫的努力	14.62 (2.79)	14.42 (2.70)	0.44
全体	44.88 (7.39)	45.02 (6.26)	-0.11

男子：N=56、女子：N＝66　*p<.05　**p<.01

Table 2　子どもから見た父親の完全主義における性差

	男子平均（SD）	女子平均（SD）	t 値
理想追求	16.46 (4.39)	15.83 (4.01)	0.83
失敗恐怖	12.02 (3.47)	11.09 (3.00)	1.58
強迫的努力	13.52 (2.49)	12.38 (3.00)	2.56*
全体	42.00 (6.79)	39.30 (7.14)	2.20*

男子：N=56、女子：N＝66　*p<.05　**p<.01

Table 3　子どもから見た母親の完全主義における性差

	男子平均（SD）	女子平均（SD）	t 値
理想追求	16.84 (4.52)	15.53 (3.97)	1.70
失敗恐怖	13.38 (4.01)	11.55 (3.60)	2.65**
強迫的努力	13.64 (2.93)	13.02 (2.62)	1.25
全体	43.86 (7.84)	40.09 (6.39)	2.92**

男子：N=56、女子：N＝66　*p<.05　**p<.01

Table 4　子どもの抑うつ傾向における性差

	男子平均（SD）	女子平均（SD）	t 値
抑うつ傾向	9.80 (4.92)	10.26 (5.40)	-0.48

男子：N=56、女子：N＝66　*p<.05　**p<.01

Table5　子どもの抑うつ高群と低群の比較

尺　　度	群	平　均　値	S　D	t　値
父親の養育の暖かさ	高	29.41	5.10	-2.99**
	低	32.17	5.18	
母親の過干渉傾向	高	10.98	3.02	2.01*
	低	9.81	3.41	

高群：N=56、低群：N=70　　*p<.05　**p<.01

Table6　子どもの完全主義得点（子どもからみた母親×実際の母親の完全主義）と分散分析結果

子どもの母親の完全主義イメージ	高		低		分　散　分　析		
実際の母親の完全主義	高	低	高	低	子ども	実際	交互作用
N	37	27	26	36	高>低***	n.s	n.s
平　均　値	47.95	47.22	41.46	42.39			
SD	6.33	6.41	6.24	5.54			

***p<.001

Table7　子どもの完全主義得点（子どもからみた母親×実際の母親の完全主義）と分散分析結果

子どもの母親の完全主義イメージ	高		低		分　散　分　析		
実際の母親の完全主義	高	低	高	低	子ども	実際	交互作用
N	37	27	26	36	高>低***	n.s	n.s
平　均　値	47.95	47.22	41.46	42.39			
SD	6.33	6.41	6.24	5.54			

***p<.001

5．参考文献

1) Chang, E. C. 2000 Perfectionism as a predictor of positiveand negative psychological outcomes: Examining a mediational model in younger and older adults. Journal of Counseling Psychology, 47, 18-26.

2) Flett, G. L., Hewitt, P. L., Oliver, J. M. & Macdonald, S. 2002 Perfectionism in children and theirparents: Ade-velopmentalanalysis.InG. L. Flett&P. L. Hewitt(Eds,), Perfectionism: Theory, research, and treatment. Washington,D.C.: American Psychological Association.

3) Frost, R. O., Lahart, C. & Rosenblate, R.1991 The development of perfectionism: A study of daughters and their parents. Cognitive Therapy and Research, 15, 469-489.

4) 伊藤菜穂子　2004　不適切な動機による完全主義が心理的不適切に及ぼす影響　心理臨床学、22(5)、542-551

5) 伊藤拓・上里一朗　2002　完全主義およびネガティブな反すうと抑うつ状態の関連性—抑うつの脆弱因としての完全主義の再検討　カウンセリング研究、35(3)、185－197

6) 伊藤拓・竹中晃二・上里一朗　2001　うつ状態に関与する心理的要因の検討—ネガティブな反すうと完全主義、メランコリー型性格、帰属様式との比較—　健康心理学研究、14(2)、11－23

7) 亀口憲治　1992　家族システムの心理学・<境界膜>

の視点から家族を理解する　北大路書房
8)亀口憲治　2000　家族臨床心理学・子どもの問題を家族で解決する　東京大学出版会
9)金子俊子　1991　青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究　青年心理学研　究、3、10-19
10)河村照美　2003　親からの期待と青年の完全主義傾向との関連　九州大学心理学研究、　4、101－110
11)向井久美子　2002　偏見の親子間伝達―媒介する親イメージ　Psiko 3 (10)　24－29
12)村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・他　1996　学校における子どものうつ病―Birlesonの小児期うつ病スケールからの検討―　最新精神医学、1、131－138
13)村瀬嘉代子　2001　子どもの父母・家族像と精神保健――般児童の家族像の十年間の推移並びにさまざまな臨床群の家族像との比較検討　児童青年精神医学とその近接領域、42(3)、184-198
14)村瀬嘉代子　2005　母親の視点から　こころの科学、122、38-43
15)西出隆紀・夏野良司　1997　家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか　教育心理学研究、45、456－463
16)西園昌久　1987　コミュニケーションからみたうつ病患者の家族特性　家族療法研究、4、122－127
17)大谷佳子・桜井茂男　1995　大学生における完全主義と抑うつおよび絶望感との関係　心理学研究、66、41－47
18)落合・佐藤　1996　親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究、44(1)、11－22
19)Pacht, A. R. 1984 Reflections on Perfection.American Psychologist, 39, 386-390
20)六角洋子　子どもの抑うつに関する研究動向　お茶の水女子大学人文科学紀要、52、317-388
21)佐治守夫編著　思春期の心理臨床・学校現場に学ぶ「居場所」つくり　日本評論社
22)坂戸薫・染矢俊幸　1999　PBI(Parental Bonding Lnst rum-ent)とうつ病　精神科診断学、10、399－407
23)坂本真・丹野義彦・大野裕　抑うつの臨床心理学　東京大学出版社
24)桜井茂男・大谷佳子　1997　“自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究、68、179－186
25)桜井茂男・大谷佳子　1994　完全主義と抑うつ傾向の関係についての研究―Burnsによる完全主義尺度を用いて－奈良教育大学紀要、43、213－222
26)桜井茂男　2004　子どもと親における完全主義の関係　筑波大学心理学研究、28、37－42
27)桜井茂男　2004　完全主義は抑うつを予測できるのか―小学生の場合―　筑波心理研究、27、51－55
28)佐藤寛・新井邦治郎　2003　子ども用抑うつ自己評価尺度（DSRS）の因子モデルの検討　筑波大学心理学研究、25、123－128
29)Sheeber, L., Hops, H., ,Alpert, A., Davis, B., & Andrews,J. 1997 Family support and conflict: Prospect ive relationsto adolescent depression. Journal of Abnor mal Child Psychology, 25, 333-344
30)島悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘　1985　新しい抑うつ性自己評価尺度について　精神医学、27(6)、717－723
31)染矢俊幸・高橋三郎・門脇真帆　1996　ＥＭＢＵ（養育体験認知に関する自己記入式調査票）の日本語版作成と信頼性検討　精神医学、38(10)、1065-1072
32)菅原ますみ・八木下暁子・詫摩紀子・小泉智恵・葉地山葉矢・菅原健介・北村俊則　2002　夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連―家族機能および両親の養育態度を媒介として　教育心理学研究、50(2)、129－140菅原ますみ　1997　養育者の精神的健康と子どものパーソナリティの発達；母親の抑うつに関して　性格心理学研究、5(1)、38－55
33)傳田健三・賀古勇輝・佐々木幸哉・伊藤耕一・北川信樹・小山司　2004　小・中学生の抑うつ状態に関する調査―Birleson自己記入式抑うつ評価尺度（DSRS-C）を用いて―児童青年精神医学とその近接領域、45(5)、424―436
34)辻井正次・本城秀次　1998　不適応現象の評価―児童期の抑うつ－　精神科診断学、9、189－199. 辻平次郎　1992　完全主義の構造とその測定尺度の作成　甲南女子大学人間科学年報、17、1－14.
35)辻平治朗　1992　完全主義の構造とその測定尺度の作成　甲南女子大学人間科学部年報、17、1－14
36)Vieth, A. Z. & Trull, T. J. 1999 Family patterns of perfectionism: An examination of college students and their parents. Journal of Personality Assessment, 72, 49-67